

日本人のアイデンティティを活かした交流・創造の舞台づくり

～関西からの発信～



人口と文化。我々は、近未来の日本が抱える課題を、人口に起因する量的側面と、文化に起因する質的側面から捉えた。

さらに、グローバルな観点から、日本の立ち位置や環境・エネルギー面での制約を踏まえたうえで、22世紀の国づくりを展望する。

戦後の高度成長により形成された20世紀の都市化社会、失われた30年という苦しみを経験した21世紀の都市型社会を経て、22世紀の日本はUrban, Rural, Natureのバランスをどう考えるべきか？

半減する人口は問題ではない

出生率向上策を根幹から考える

22世紀の国づくりを展望するうえで、人口問題は避けられない。趨勢では人口は半減する見通しであるが、それが根本的な問題ではない。日本の半分の人口規模で、豊かな暮らしをしている国は現在でも存在する。問題は、人口が「減り続ける」ことにある。我々は、出生率向上のための課題を、「交流の場づくり」と「地方分散・定住」から考える。

交流の場づくり

- ▶ 出会いのあるまち。交流による少子化対策を真面目に考える。
- ▶ 女性が日中に芸術を楽しむ。そのような場づくりに取り組む。

出生率向上

地方分散・定住

- ▶ Urbanよりも出生率が高いRuralへ。若者の東京流出を止める。
- ▶ 北欧の「ヒュッグ」に学ぶ。家族と過ごす居心地の良い時間を取り戻す。

土地の記憶・魂 — Genius loci

地域文化 地域ならではの必然性

諸外国との相対的な関係を考えると、日本は人口や経済活動の規模(量)で存在価値を示す時代ではなくなる。量でなく質。問われるのは文化である。日本古来の伝統文化から、21世紀のサブカルチャーまで、日本の文化を問い直したい。一方、日本国内においても、土地の記憶・魂(Genius loci)が文化として引き継がれてきたまちが生き残る。例えば、「祭」。日本では「祭」を通じて、土地の記憶が引き継がれ、その繰り返して地域経済文化を保ってきた。文化の本質は繰り返し、再生することにある。

良く生きて良く死ぬ 一身二生時代の幸福を支える共助

人口の構造に目を向けると、寿命百歳の「一身二生」時代が到来。「良く生きて」、「良く死ぬ」。人生の後半を幸せに過ごすためには「健康寿命」のための環境づくりが求められる。IoT等の最新技術は、遠隔地からの見守り、診察・診断を可能とする。しかし、「手当て(手を当てる)」という言葉に象徴されるように、日本人にとって医療の基本は周りの人の手の温もり。「共助」の精神と、それを可能とする国づくりが課題となる。

グローバリズムの動向は、日本人のアイデンティティの確立を迫る

世界的には人口増加がさらに進み、人口減少が進む日本では移民問題が現実化する。寛容性をもって異質なものを受け入れ、独自の感性で昇華していくのが日本人。自然のなかで虫の声や雨の匂いを感じることができるのも、日本人特有の感性。世界的にグローバリズムが問われているいま、われわれのアイデンティティを再確立する絶好の機会である。

交流→融合→変換 創造的イノベーション

20世紀半ばの高度成長期を経て、現在の東京一極集中に至った日本。経済合理性を追い続けた結果、地域文化が失われた。グラノヴェッターが提唱したのは「The strength of weak ties (弱い紐帯の強み)」。失った文化を再生し、新たな発展を遂げるためには、土地の記憶・魂を呼び起こすとともに、新たな情報も取り入れたイノベーションが必要と考える。イノベーションは、シュンペーターが「neue Kombination (新結合)」と称した概念。地域文化再生においては、交流を通じて様々な情報を収集し、融合・編集・変換することを通じて、創造される価値ではないだろうか？

Urban? or Rural?

作画: イマイカツミ

都市と自然のバランスの再調整

我々は、人口が半減する22世紀の日本を、都市と自然のバランスを再調整する絶好の機会と捉える。Urban(都市地域)とRural(里山地域)が適度な密度で調和し、美しい景観と豊かな水・緑のもとで営む健康で文化的な暮らし。その外側に広がるNature(自然地域)は、人口減に伴い我が国の自然の再生力に任せ、環境インフラとして再生させる。経済合理性を追求する時代は、21世紀で終わった。

交流・創造の舞台 22世紀のUrbanとRural

SOHO等で生まれた生活の余裕は、会食、スポーツ、アート、観光等の文化的活動、フェイス・トゥ・フェイスの知的交流を通じたイノベーション活動に。それが都市の役割だ。里山には、付加価値を求める知識労働者が移住する。土地の記憶・魂に根ざす地域アイデンティティを大切にし、ヒト・モノ・コトのマッチングとコーディネーションを図る。これからの100年で社会実装される高度技術は、人々の交流と連携を支え、人間らしい暮らしのために使われる。

22世紀型人間都市 人生の中での多様な選択

C・アレグザンダーが1970年の日本万博博覧会に出品した「パターンランゲージによる人間都市」。22世紀の国づくりのヒントが20世紀にあった。我々が問題提起として示した風景。これは、UrbanかRuralかの選択ではなく、人生の中で多様な選択ができる「22世紀型人間都市」だ。土地の記憶・魂を引き継いだ新たな地域文化が生まれ、UrbanとRuralのどちらも体感できる幸せで人間らしい暮らし。生まれ故郷から引越さなくても、出会いと交流のある豊かな暮らしができ、パートナーや家族にも恵まれる。「22世紀型人間都市」。我々が提案する22世紀の国づくり。

人口問題に正面から向き合い、東京一極集中を是正しつつ、Urban, Rural, Nature のバランスを考えて地域文化を育てる。
それを牽引する役割は、かつて日本の都として栄えたものの、いまは日本最大の地方都市圏となってしまった関西にあると考える。
かつての栄光という幻想に捉われることなく、土地の記憶を活かしながらかつての関西を再起動するにはどうすればよいか？そして、土木の役割は何か？

関西はセミラティスな地域構造

関西には、大都市、中小都市、農村、山村、漁村等で、それぞれの文化、生活スタイルがある。世界遺産が点在し、豊かな都市景観・田園景観があり、紀伊山地・日本海・瀬戸内といった自然の恵みを有する。私鉄沿線文化も関西で発達した文化の一つだ。かつては、舟運・北前船のネットワーク、現代では鉄道・道路網の整備による地域内外の交流があり、更に情報インフラの発達により、人生の各段階での生活シーンの選択肢は広がる…はずだった。

「22世紀型人間都市・関西」に向けて

ところが、現実異なる。20世紀半ばの高度成長期から関西の地盤沈下が始まり、「平成の失われた30年」を通じて、さらに相対的な位置づけが下がりつつある。いまいちど、関西のセミラティスな地域構造を掘り起こし、半減する人口でも豊かに暮らすための文化政策のあり方を見つめなおし、「22世紀型人間都市・関西」を提案する。



「ホンモノ志向で寛容」 関西のアイデンティティと地域文化

「天下の台所」の大坂。「都」の京都。「貿易」のまち神戸。「まほろば」の奈良。「近江商人」の滋賀。「徳川御三家」の和歌山。関西の文化は多様で奥深い。「江戸の粋（いき）と上方の粋（すい）」といわれるように、関西はホンモノ志向で、何でも受け入れる。寛容で共感（エンパシー）に優れ、人情があり、言葉は多重性に富む。浄瑠璃を文楽という様式に変え、辻噺から大衆芸能である落語をつくった。昆布から出汁をつくり、農業と工業を商業が繋いで東洋のマンチェスターが生まれた。関西は、色々なものを受け入れ、融合し、新たな文化に変換する力があつた。かつては…
関東を追いかけたために失われた関西文化。22世紀にどのように再生させるか？

改めて問われるインフラの役割

交流のための交通インフラもセミラティスな構造が必要である。国際交通網、国土幹線交通網、地域間交通網、地域内交通網がそれぞれ独立するのではなく、利用目的によって複数の役割を果たす時代になる。公共交通とプライベート交通の境界が曖昧になり、人流と物流、移動と活動が一体化するケースが増える。22世紀版北前船として重要となるのは、国際空港と、西日本を連携する高速鉄道・道路網。Ruralでは、文化格差・教育格差・医療格差をなくすとともに、若者の出会い・交流を支える地域間交通網の整備が不可欠だ。さらに、大阪湾ベイエリアと瀬戸内を巡るクルーズ船も、観光・レジャーにおける北前船となる。



日本人のアイデンティティを活かした交流・創造の舞台づくりチーム

兼塚卓也（建設コンサルタント）、岩瀬諒子（建築家・景観デザイナー）、山根秀宣（不動産業・まちづくりプランナー）、弘本由香里（エネルギー・文化研究所研究員）、甲賀雅章（芸術家・クリエイター）、岡寛（IT・情報通信業）、裏英洙（医師・医学博士）、寺井翔菜（クリエイティブエージェント）、長谷川太一（会計士）、ヴァンソン藤井由実（ビジネスコンサルタント） 作画：イマイカツミ（画家）、協力：土肥寿郎（寿郎社） 資料収集・整理：伊藤麻衣子・上田隆・加古真一・畔取良典・沢野嘉延・白水靖郎・末祐介・坪村健二・手皮章夫・南部浩之・新田耕司・萩原久吉・八谷誠・森兼政行・森博昭（建設コンサルタント）

「近江商人の三方よし」 商人文化の原点回帰

日本には創業200年以上の老舗が多く、世界の約半分を占めている。その約9割が江戸時代に創業されており、その源流は近江商人にある。交通の要衝である近江から日本全国、さらには海外にまで自由に行き来した近江商人。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」の精神が有名だが、ポイントは「世間よし」にある。社会性がなければ商売は持続しないという商人文化が、老舗を継続させている所以である。ところが、「平成の失われた30年」で、関西経済は大きく地盤沈下。東京一極集中のなか、「三方よし」の精神が薄れてきていることが一因ではないだろうか？22世紀は、原点回帰。フェイス・トゥ・フェイスの交流により、地域に根付いた「世間よし」の精神を取り戻す。



22世紀の「出汁」とは？北前船に学ぶ

北前船によって蝦夷地から運ばれた昆布が関西の食文化と融合して出来た「出汁」。世界的にも「DASHI」として「うま味」の存在を知らしめた。出汁は、日本料理のベースとなる存在で、これに様々なものが足されて独自の料理が生まれた。「出汁」をベースとした様々な化学反応。22世紀の関西に、「出汁」に匹敵する新たな基盤技術を作り、化学反応を引き起こす必要がある。



新・第六次産業は「医食農同源」

では、これからの基盤技術は何か？我々は、「医療・健康」分野に着目する。神戸や大阪が先導する高度医療産業と関西及びその周辺の伝統医療の融合。関西食文化、近江牛に代表されるブランド食材、瀬戸内や日本海などの豊かな海の恵みを組み合わせる。さらに、琵琶湖・水都大阪・瀬戸内の水文化を融合・変換することによって、地域文化に根ざす新たな医食農ビジネスを新・第六次産業として創出する。

築土構木の本懐

関西版シュタットベルケ

22世紀におけるインフラ整備スキームは、大きく変わる。電気自動車の普及によりガソリン税は走行税に。インフラ整備目的は、地域振興、環境負荷軽減といった側面が強くなり、都市開発ファンド、環境・エネルギーファンドなどの多様な財源スキームを構築する。運営主体については、空港・港湾・高速道路・鉄道が一体となった関西交通オーソリティ、さらに電気、ガス、水道事業も含めた地域公社を提案する。地域間交通・地域内交通についてはMaaSやシェアリングモビリティ等で移動サービスの高度化を図るとともに、エリアマネジメント等とも連携し、収支状況に応じた多様な上下分離方式を導入する。



交流都市の「場」づくり

関西の都市が有する世界レベルのコンテンツを活かし、世界レベルの交流の場を創る。例えば、水都大阪では、カフェ・レストランなどを豊かな水辺空間を利用して整備。京都や神戸では面的な交通マネジメントとエリアマネジメントを一体的に行い、ウォークアブルな国際観光地区・都心地区を実現。オープンカフェなどの設えの場とする。これらの「まちなか広場」には、国内外の様々な人々が集い、交流し、芸術・アート活動を行い、文化やビジネスが生まれる。イノベーションのための「サロン空間」や京都の路地も、大切な交流の場だ。Post urban worldで不可欠な、モノ、コト、ヒトのマッチング機能が、ここにある。



知が集積する里山経済モデル

Ruralでは、土地の記憶・魂を辿ってその地域の根源に触れるとともに、女性が遊べて出会いのある場を作ることが大切だ。土地の記憶・魂に根差す魅力的な場が、世界中から人々を惹きつける。里山オーベルジュ・レストランなどもその一例だ。伝統的な「祭」を大切にしつつ、地域から出た若者や地域外の知識人が集まる芸術イベント等を行い、Uターン、Iターンを仕掛ける。関西のRuralにある豊かなコンテンツを使えば可能である。



22世紀版適塾とパトロネージュ —土木学会への期待

関西には、地域文化を育てるクラブ・サロンの空間があつた。松下幸之助、佐治敬三、鳥井信治郎といった、地域文化育成をパトロネージュする人たちがそれを支えた。松下幸之助の「やってみなはれ」のように、チャレンジに投資する風土もある。22世紀にも同じ仕組みが必要だ。関西には、多くの大学がある。適塾や懐徳堂のように、産・官・学が一体となって実践のフィールドを通じて学ぶ「場」も必要で、土木学会がその礎を作っているかどうか。関西は実験主義。2025年日本万国博覧会を契機に、始動することを提案する。「関西ルネサンス」の始動は土木学会から！

